

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉

第28号 1998年7月1日

『機巧図彙』と細川半蔵を考える

鈴木 一義

「手で始まり頭で終わる」。ノーベル賞学者湯川秀樹氏に師事された、ある理論物理学の先生に聞かされた言葉である。理論物理といえど、頭だけ使っていたのでは新しい発想は生まれない、ということらしい。私の好きな言葉に「習うより慣れる」と言う言葉がある。学生時代は工学部に学び、エンジニアとしても多少社会経験を持ったことがあるので、身にしみた言葉でもある。両方とも、実の伴わない頭でっかちになつてはダメだということだ。

学問や技術分野に限らず通用するこの教訓を、江戸時代既実践していたのが、寛政八年（一七九六）に出版された『機巧図彙』である。同時代では世界的にも希な書といわれている。『機巧図彙』と著者の細川半蔵については、地元土佐（現在の南国市）の出身であり、郷土史家の田中瀧治氏や猪野吉保氏、からくり半蔵研究会などの活動によって、ご存じの方も多いと思うが、拙論を述べることをお許し願おう。

『機巧図彙』と細川半蔵について、私が一番評価してきたのが、「からくり

り」という誰でもが興味を持つテーマを、幕府の改暦に参加するような一流の学者が実践的な図解書に著したということである。「習いながら慣れ」られる実践的な書であることは、私自身が『機巧図彙』をもとに茶運び人形をはじめ、数種類を再現製作できたことから明らかである。

複製した茶運び人形や五段返り人形は、見事その動きを再現した。複製して、あらためて人形の図解が詳細をきわめ、各部の寸法も正確なものであることがわかった。その図中には今日、機械製品などの投影図で一般に用いられている図法に極めて近いものがあり、図法の確立されていない当時であつては、常に機械に触れ、書きなれていなければでてこないものである。

技術が秘伝や独占という形で存在した江戸時代において、今日でも驚くほどのすばらしい図法や詳細な製法により実製作可能な書が、出版されているというのは重要なことであろう。特に理論的な背景のない時代では、「習うより慣れる」的な影響が大きいからである。『機巧図彙』は再版、再々版

されるほど広く読まれたものであるから、作ってみる者も多数いたであろう。そして、細川半蔵自身も自ら時計を作つたりしたことが伝えられており、決して頭だけの人物でなかったことは間違いない。『機巧図彙』には、自分で製作していなければ書けないようなところが随所に見られるのである。

ところが、これまで『機巧図彙』中に図解された機構と同じ機構を持つからくり人形等は、一つも見つかつていなかった。からくり人形は壊れやすいから、残らないのは仕方ないとは思いつながら、少し残念に思っていたのだが、実は以前から気にかかるものがあつた。それは高知城に伝えられるという時計である。この機会に調べていたのだと伝えられ、『機巧図彙』首巻で「時計（とけい）は諸機巧の根本なり」として、一番最初に図解される「柱時計」に、その大きさ寸法、歯車列、歯数など、全く一致したのである。伝承は『機巧図彙』が世に出て二〇〇年の後に、実証されたのである。

冒頭に引用した「手で始まり頭で終わる」と言う言葉は、新しいものではない。細川半蔵、そして同じ物理学の先駆者、高知出身の寺田寅彦も実践してきたことなのだ。

（国立科学博物館 研究官）

特別展 『からくり 夢と科学の世界』

細川半蔵とその時代』によせて

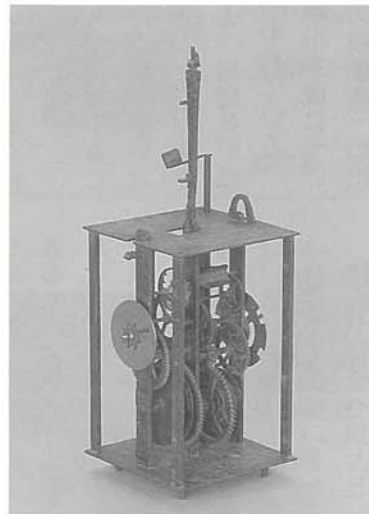
会期 前期 七月十七日(金)～八月十六日(日)、後期 八月二十一日(金)～九月二十三日(祝・水)

下村 公彦

はじめに

「今年には細川半蔵没後二百年です。これを記念して『からくり展』を…」と、南国市からくり半蔵研究同志会の方からお話を頂いたのは一昨年のことでした。それでは、ということと急遽実現したのが、企画展『半蔵浪漫紀行からくり二百年』でした。この時は、国立科学博物館の鈴木一義氏に展示全般にわたってお世話になりました。

そして、「今度は本格的で大規模なからくり展を…」ということになり、鈴木氏に展示顧問をお願いし、種々御指導頂いてこの度の特別展開催に至りました。ここでまず、同氏に深謝の意を表したいと思います。以下、特別展の概要を紹介いたします。



一丁天符掛時計 (当館蔵)
伝細川半蔵作 (高知城懐徳館旧蔵) 全体の構造から歯車の歯数まで『機巧図彙』の内容と一致しています。

一、からくり半蔵 (3F特設会場)

細川半蔵頼直は長岡郡西野地村(現南国市)の出身です。彼の業績といえば、第一に『機巧図彙』出版(一七九六年)があげられます。本書には、各種の和時計やからくり人形の解説が設計図入りで記載されています。

特別展では、導入部を「機巧図彙の世界」と題し、和時計や茶運び人形・段返り・鼓笛児童・品玉人形など約三十例を紹介いたします。中でも「七妖品玉人形」には、「後免大津屋金蔵自作」の箱書があり、注目されます。ところで、からくりと時計がどうし



茶運び人形 (石川県 平戸善一郎氏蔵)
動力は鯨のひげゼンマイで、内部は全て木製。



蟹の盃台 (個人蔵)
京の傾城2代目吉野太夫が所持していたもの。

と一緒に?と疑問をもつ方もいるかもしれません。実は、からくり人形のあの微妙な動きは、時計の調速機構(歯車の回転を一定に保つ機構)の応用からきているのです。からくりと科学の結びつきは、こういう所にもあった訳です。

半蔵自身も、からくり技術者であると同時に天文学者でもありました。一八九〇年代、幕府によって寛政の改暦が実施されますが、この時、彼も「暦作御用手伝」を命ぜられ、江戸の天文方に赴いています。本展では、この事に関する公式文書に加えて、半蔵以前の土佐の天文学者(谷秦山・川谷蘄山など)に関する資料を展示します。特に今回は、谷家旧蔵天球儀(洪川春海作、重要文化財)も出品予定で、また寛政改暦事業の中心人物の一人、間重富に係る資料も多数出陳されます。

二、「江戸の平和」とからくり

(3F)

江戸時代は、元和(げんな) (一六一五)以来大きな戦乱は跡を絶ち、「天下泰平」の世となりました。そして、上方や江戸を中心とする町人の実力も成長してゆきます。この中で、座敷からくりやからくり芝居などの庶民的なからくりが流行しました。「機巧図彙」の成立も、こうした世相を反映したものと考えられます。

本展では、座敷からくりの名品「蟹の盃台」や十七世紀後半から隆盛した竹田からくり芝居(創始者「竹田近江」)関係の資料を展示します。そして、この竹田芝居の系譜を引いた昭和の桐生からくり芝居(群馬県)の実物も、舞台装置も含めて紹介します。加えて、



エレキテル複製(国立科学博物館蔵)
平賀源内は足かけ7年をかけ、安永5年(1776)にエレキテル復元に成功しました。

山車からくりで有名な半田祭(愛知県)の資料や各種の覗きからくりの逸品も多数展示します。なお、これらについては、見学者に実際に試して貰うための復元模型もセツトする予定です。(次頁参照)

三、からくりと科学技術

(3Fと1F)

讃岐出身の平賀源内が復元したエレキテルは、のちに一種のからくりとして見せ物になっていました。源内は半蔵と同世代の人物ですが、次の世代では同じ讃岐の久米栄左衛門が活躍します。そして幕末には、「加賀(石川県)の源内」こと大野弁吉が種々のからくりを発明、また久留米(福岡県)からは「からくり儀右衛門」こと田中久重が出来ます。

本展では、右の各人物に係る有名な資料を一堂に並べます。中でも絶対見逃せないものに、源内のエレキテル(複製)、栄左衛門の扇風機、弁吉の飛び蛙、久重の弓曳童子(次頁参照)などがあります。また、弁吉の「一東視窮録」等、彼等が科学者であった側面を示す資料も展示します。

ところで、幕末には海防が重要課題となり、従来は医学面に限られていた洋学研究の中に軍事科学

が大きな比重を占めてくるようになります。中でも進んでいたのが、鹿児島と佐賀の精煉方でした。田中久重も、佐賀藩精煉方の一員として蒸気機関の研究などに励んでいます。本展では、蒸気船雛型などの佐賀本藩精煉方の資料や武雄鍋島家に伝わる洋学関係資料を展示します。

四、オートマタとからくりの実演

(1F)

オートマタとは、西洋の自動機械人形すなわちからくり人形のことです。金属材料を使った精巧な動力機構をもち、細部までリアルに動くのが特徴です。本展では、財団法人長山財団の協力により、一九〇〇年前後にフランスやスイスで製作された名品が紹介できることになりました。人形の動きはビ

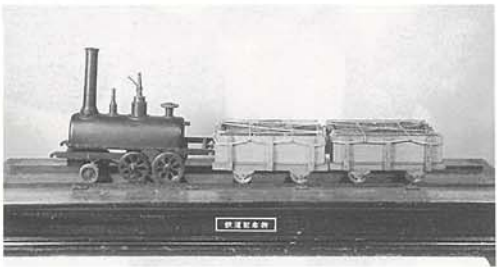
デオで鑑賞頂く予定ですが、実演用も一体用意しています。

なお、一階ではさまざまなかからくりの実演も実施する予定です。

おわりに

以上、三百余点に及ぶ展示資料の中から、特に注目されるものについて紹介してきました。右のほかにも、多数の神戸人形のこと、宇和島の前原巧山のこと、地元の江口市左衛門や楠瀬直助のことなど、まだまだ言い尽くせません。それらについては、是非一度御自身の目でお確かめ下さい。

最後に、貴重な資料を御出品下さった方々を初め、特別展開催のため種々御協力頂いた皆様に心よりお礼申し上げます。



佐賀藩製造 蒸気車雛型
(鍋島報効会蔵 佐賀県立博物館保管)



オートマタ「手紙を書くピエロ」
(財団法人長山財団蔵)

トピック① 歯車は木だ！

茶運び人形の歯車は堅くて丈夫な榎の木で、木口を歯先に向けて6枚の板を貼り合わせています。木の弱点を克服して壊れにくい歯車にするための工夫です。



「機巧図彙」

トピック② 体内の鯨文化

金属製ゼンマイを作るのが難しかった江戸時代、からくり人形のゼンマイは鯨のヒゲ製でした。これも日本の鯨文化のひとつと言えるでしょう。



鯨のヒゲ

● 面がぶり

後ろ向きになった瞬間に猩々の面をかぶりませう。人形の下では何本もの糸を人が操っています。祭礼の花形「山車からくり」のひとつです。



② 面をかぶったところ

● 茶運び人形

茶運び人形の着物を脱がせると、歯車やゼンマイがあらわれます。西洋の機械時計を応用したからくりが人形を動かしているのです。動かすときにはゼンマイを巻きます。



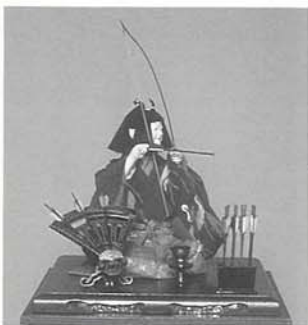
① 素顔の人形



足元には人形をあやつる糸がたくさんあるよ。

● 弓曳童子

品玉人形と同じ「台付からくり」です。数メートル離れた的に矢を命中させます。



① 弓に矢をつがえる。



② 弓をひきしぼる。



③ 矢を放つ。その後で次の矢をとる。

トピック③

失敗もまたよし
ときどき失敗する人形がいます。矢が的をはずしたり、綱から落ちたり…。見ているこちらはハラハラドキドキ。失敗も楽しい演出です。

(文・構成 中村淳子)

実演！ からくり人形

—なぜ動く図鑑—



特別展では、からくり人形の実演を行ないます。実演人形たちがどのような動きをするのか、なぜ動くのかをこの頁で少しご紹介しましょう。
ぜひ会場で確かめてくださいね。

実演情報

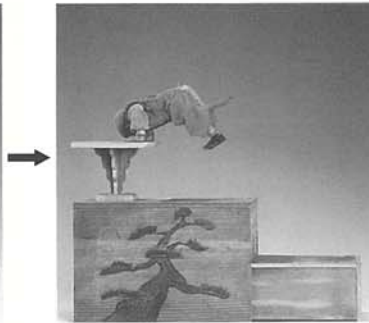
- ★とき 7・8月は午前11時と午後2時
9月は午後2時
- ★ところ 歴民館1階 企画展示室
- ★人形 段返り・茶運び人形・面かぶり・弓曳童子など

● 段返り

段返り人形のからだには水銀が入っています。この水銀が、高い方から低い方へ流れて人形を動かします。



① 人形を逆立ちさせると、水銀が上半身に流れる。



② 上半身に水銀がたまって重くなると、でんぐり返って下の段に着地する。



③ 水銀が腰にたまり、その重みでおむけになって手をつく。すると腰が高くなり、上半身に水銀がたまり足があがって逆立ちを……。 (繰り返し)



品玉人形「台付からくり」は箱の中にかからくりがあるよ。

● 品玉人形

人形が箱を上げ下げするたびに、箱の中の品が変わります。ちなみに品玉とは手品のこと。

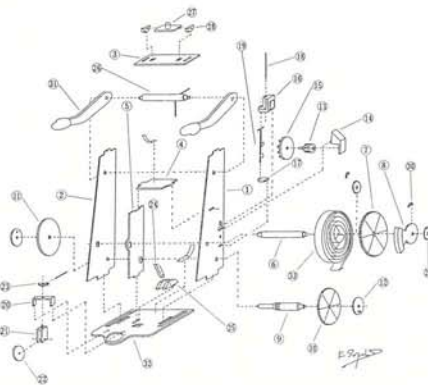
台の中に仕込まれた機構によって台上の人形が糸に引かれて動くのです。これを「台付からくり」といいます。

茶運び人形はこんな動きをする

- ① 人形は茶碗を持つと前進する。ゼンマイの力が歯車に伝わり足元の動輪を動かすんだ。
- ② 茶碗を取れば人形は止まる。人形の手に連結したストッパーがかかるんだ。
- ③ 人形の手で茶碗を返すとリターンして元の所へ帰る。前輪の向きを変えるカムが働くからだ。



茶運び人形のからだの中には38個の部品があるよ。



茶運び人形組立図 (鈴木一義氏 作図)

No	個数	名称	No	個数	名称
1	1	左側板	18	1	ストッパー
2	1	右側板	19	1	棒天符
3	1	天板	20	1	前輪支持台
4	1	中棚板	21	1	前輪支持アーム
5	1	仕切り板	22	1	前輪
6	1	ゼンマイ軸	23	1	カジ
7	1	1の歯車	24	1	カムアーム
8	1	カム(行戻)	25	1	カムアーム台
9	1	車軸(動輪軸)	26	1	腕軸
10	1	2の輪(動輪)	27	1	首台
11	1	車輪	28	2	首台支え
12	2	クランク軸(足)	29	2	ラチェット(留輪)
13	1	がんぎ車軸	30	2	ラチェット爪
14	1	がんぎ車軸受	31	2	腕
15	1	がんぎ車	32	1	ベース(底板)
16	1	ストッパー受	33	1	ゼンマイ
17	1	天符受			

江口市左衛門肖像画

野本 亮

江戸初期、幡多郡下田浦に江口市左衛門という豪商がいた。新屋の屋号をもち、酒造業、廻船業を営み巨利を得たという。機巧を得意とし、「世界の図」などの機械を製作したことから、からくり市左衛門、世界市左衛門の異称があつた。また、野中兼山の懐刀として、幡多地方の水路建設に際し、水準測量に従事した技術者としての側面もよく知られている。

この市左衛門の業績については、岡本信古（真古）の『土佐國崎人傳』に詳しいが、この肖像画の上部にも略歴が記されているので参考までに紹介しておく。

「江口市左衛門 男 市左衛門之傳 江口市左衛門延光、後の名は正直といふ。其先出雲初め一条家に仕へ、後秦氏に仕ふ。国あかたまりて後、其子孫新屋と号し、世、幡多郡下田浦に住す。豪家の間へあり。市左衛門工夫精密にして機巧を能し世界の図といふ機巧を工ミ出しけれハ、世に賞してからくり市左衛門とも世界市左衛門とも称す。其世界乃図といふは究めて珍しく

人の眼を驚かしければ、その世何にまれ面白き事をは世界の図と云習はしける。あるとし大坂へ登りしに川口湊の浚へあり。水底にいと大きな橋杭の朽残りたるを除くとて、若干の人数を費セとも除き得ず。兎せんかくせんと衆議の折から往きふれて忽一計を生し試んと乞ふ。有司聞て其意に従ふ。こ、において潮の涸るを待ち朽残りたる橋杭に舟二隻を左右に結び付け舟中に重ミを載せ置く。潮漸く満来るに従ひ舟浮ひ杭動きて終に抜出たり。観る人賞翫セざるはなし。今時樽拔と称するもの此法に倣ふといふ。又同所からくり偶人は天下第一と称す。然るに善を盡して美を尽さ、るものハ彼偶人進む事ありて退くことなし。市左衛門一見して工夫の足らざるを笑ふ。作者聞答め其故を問ふ。答へに進む道あれば退く理なくてやはある。是を知らざるは如何と作者忽面をやらけ、子かいふ所當れり。我常に工夫を凝セとも考へ至らず。子は誠にた、人に非らず。願くは奇術を惜む事なふして教へよと乞ふこと浅からさりしかは、吾嗜む術な

れハ安き事なりとて指南す。此後この地の偶人進退自由を得て善美を尽せり。又本國津呂の湊は寛文元年辛丑の春、野中高山子の拳に穿ち成セり。もとは無砂の石地にして漁舟を容るはかりの小湾あり。又波底に三ツの大岩あり。是を除かされハ船舶の出入なりかたかく除かんとするに、陸を去ること百二十餘歩にして、狂濤激波の中にあれば堤防を成すに由なし。よりに三岩の外を元とし、両端に斜に堤塞を設け扇の要あるか如くし、土囊を以て墳き役夫数千を催し其内を深く鑿ち、潮退き尽るを待て堤塞を放ち除く。あます所の積水内外の深ミに帰して干潟となり三岩共に頭ハる。此時に乗して暫時に伐碎く。此方市左衛門の工夫に出たり。高岡郡池の内村の池を潰せし初め、市左衛門木偶人を作り池中に入れ置くに、常は水中に沈みて見へず。往來の人砂石を投すれハ忽浮ふ。年経て漸く水浅セ加ふるに人力を以てし終に若干の良田となれり。又船舶の滓水をひく用器をすつぽんと号し、是もこの市左衛門か初製なりとぞ。旧と下田の浦は中村の君しろし召されしかは御船逍遙の時毎に市左衛門か宅に憩し給ふ。其設けに上町下町といふ二ツの坊を打またかせて家を作り三層の楼を立、楼下を往來の坊とし港より居宅まで堀をほり、名つけて櫛江川といふ。此川の跡は僅



江口市左衛門肖像画（江口善夫氏蔵）

に存す。家業は酒を製し船舶数隻を持ちて炭薪を大坂に輸す。こ、を以て川上より下る。櫛本船ヨリ通ふ船みな檐下にさし寄せて自由を叶へ、当時西郡に於て肩を比するものなき巨商なりしが、後家勢や、衰へ天和二年壬戌六月六日天年を以て没す。法名常祐といふ。里中の浄光寺山に葬る。一略一明治十二己卯年七月 応需 景德寫□□」

この資料は、明治十二年の写しであることが末尾より確認できるが、江戸期に科学を志した土佐人の多くは、その容姿を後世に伝えていないので、写しではあつても貴重な資料といえよう（景德なる人物については不詳）。

〔参考文献〕江口喜好『土佐江口の流れ五百年』、寺石正路『土佐偉人傳』、『土佐民間科学者傳』



江口屋敷の図（江口善夫氏蔵）



からくりの本

ザワザワした縁日や町通りの中でふと足を止めて、そのまま静かにからくりが作り出す世界に魅入ってしまった事がありますか。

からくりは、中国やヨーロッパの影響を受けて江戸時代に発達したと言われています。今回は、からくりを題材とした、とても親しみやすい本を紹介したいと思います。

『細川半蔵頼直 原寸大影印と解説付』

田中瀧治氏著

三三四頁(定価三、〇〇〇円)

『機巧図彙』の著者で知られる土佐の理学者、細川半蔵。この本は、その細川半蔵の人物像を系図や文献等から明らかにしています。また、『機巧図彙』首巻・上巻・下巻の三冊もそれぞれ原寸大で翻刻されており、手軽に江戸時代のからくり人形の解説書を読むことができます。

『江戸さいえんす図鑑』

一一一頁 発売 ㈱そしえて

(定価二、〇〇〇円)

江戸時代、鎖国の中の日本で、科学は発達しました。この本は、その江戸時代の科学が生んだ顕微鏡・時計・医療器具などをソフトな口調で解説して

あります。またタイトルどおり写真がふんだんに取り込まれていて、ページをめくるごとに新しいからくり達に会えるビジュアル的にも楽しめる本です。

『甦えるからくり』立川昭二氏著

二二五頁 発売 N T T出版

(定価二、九〇〇円)

五章と番外編で章立てられたこの本は、軽快な口調で、日本・西洋・東洋各国のからくり人形や技術を写真や図版などを利用して解説しています。一方、からくりについて触れた時代時代の川柳・日記・文学本等を引用し、よ

り読者に親しめる工夫もしています。

また、昨年『からくり人形』(鈴木

一義著/写真 大塚誠治/学研/本体

一、五六〇円)が出版されました。こ

の本も、コンパクトながら、からくり

人形の写真や解説がぎっしり詰まっ

てのお薦めの本です。

これらの本は、今尚私達の身の回り

に存在しているからくり、もはや時代

の流れで姿を消してしまっただからくり

色とりどりのからくりが生き出ずる

からくりワールドに読者を招待し

てくれる本です。

(高松 恵)

ユア・ボイス

企画展「歴史と美術―維新の群像―」

は幕末維新期に新しい日本をつくろうとした人々にスポットをあてた展示でした。維新の群像たちが書き残した漢詩、書状、絵画は様々な面において新しい行方が問われている現代人に示唆するものが多かったように思います。では、企画展をご覧になられた来館者のご意見から。

「北添倍磨はもつと世に知られなく

てはならない人物ではないかと思った。」

北添倍磨は勤王の志士として活躍して

いたのですが、京都池田屋事件で闘死

しました。明治維新を見ることなく若

くして死んでいった人々、無名の人々



歴史スポット①⑥

山の生産生業模型(民俗展示室)

について学ぶ機会はありません。今回書状を展示した吉川省七郎もその一人で、戊辰戦争に一兵士として従軍し、歴史上に名を残すことなく世を去った人です。

「私は県外から越してきたのですが、これだけの歴史をもつ高知なのに地元の人々の関心が低いのに驚きます。」と資料館として拝聴すべきご意見も寄せられました。幕末維新期の主役は薩長土肥といわれ、土佐がその筆頭に挙げられることはありません。しかし、歴史の転換点に土佐人が行動したこと、例えば龍馬・慎太郎による薩長連合、山内容堂の大政奉還進言、自由民権運動など大きな役割を果たしたことをあらためて意識する機会となりました。

(曾我満子)

かつての木材の伐採や搬出の様子を再現した模型です。来館者の方が見やすいようにガラスなどで囲いをせずに展示しています。ですが、どうしても人形には興味がいくようで、開館以来七年が経過した今、何人かが行方不明になりました。残った人形たちは淋しがっています。みなさん、模型に手をふれないのももちろん、連れて帰らないようお願いいたします。

(梅野光興)

7～9月の催し物

〔特別展〕

7.17(金)～9.23(水)	からくり 夢と科学の世界 —細川半蔵とその時代—	(展示替えのため、8月18日～20日は臨時休館します)
-----------------	-----------------------------	-----------------------------

〔講演会〕 聴講無料 葉書にてお申し込み下さい (定員100名まで。先着順)

7.25(土)	細川半蔵と『機巧図彙』 スターリングエンジンと箸けんロボット	「細川半蔵…」13:20～14:40 (田中瀧治氏) 「スターリング…」14:50～16:10 (垣内保夫氏)
8.22(土)	からくりへの招待	14:00～16:00 鈴木一義氏

〔子ども歴史教室〕 *電話などで事前にお申し込み下さい。(親子連れ可・定員30名・先着順)

8.8(土)	動くおもちゃを作ろう	10:00～12:00 猪野吉保氏
--------	------------	-------------------

臨時休館のお知らせ

「からくり」展の資料の展示、搬入搬出に伴い下記の日を臨時休館と致します。
平成10年7月11日～7月16日、8月18日～8月20日、9月24日～9月30日

3階常設展示室と1階企画展示室を使った特別展です!

からくり 夢と科学の世界

—細川半蔵とその時代—



3階総合展示室は『からくり』展となります。
8月16日までの前期と8月21日からの後期で、一部資料を入替えます。

入館料 大人700円
高校生以下無料

7月17日(金)～9月23日(祝・水)

前売券 550円 (団体20人以上550円)

〔図書復刊のお知らせ〕

品切れになっていた図録や図書の
から次の三点を復刊します。数に限り
がありますのでお早目にお求め下さい。

四国の戦国群像 —元親の時代—

平成六年刊 B5版 一二頁 一二〇〇円
長宗我部元親は、現在歴史館の建つ
岡豊山に城を構え、四国統一にのりだ
した。本図録は、土佐はもろん、四
国の戦国時代の動きを資料によって概
観するものである。



いざなぎ流の宇宙

平成九年刊 A4版 一六〇頁 一五〇〇円
物部村に伝わる民間信仰の世界を豊
富な写真を用いて概観する。

いざなぎ流祭文帳

平成九年刊 B6版 一七四頁 一八〇〇円
いざなぎ流に伝わる祭文二〇種を翻
刻し脚注をつけた。

〈お詫びと訂正〉

- 前号第27号の訂正(二ヶ所)
- 二頁の二段目、箕浦猪之吉の漢詩
- ・夜は荘然たり ↓ 夜は茫然たり
- ・遥燈の歌 ↓ 遥燈の影

〔歴史館日録〕

月 日	出 来 事
四月十一日	史跡めぐり「町並ウォッチングⅢ」
四月十九日	企画展「歴史と美術—維新の群像—」(前期)閉幕
四月二十六日	企画展「歴史と美術—維新の群像—」(後期)開幕
五月九日	子ども歴史教室「れきみん探検」
五月十六日	企画展講演会
五月三十日	史跡めぐり「宿毛市史跡めぐり」
五月三十一日	企画展「歴史と美術—維新の群像—」(後期)閉幕
六月九日、十四日	くん蒸のため臨時休館
六月二十七日	子ども歴史教室「土器にさわる」

〈ユウリウ〉

茶運び人形の顔っていいですね。(中村)
そっじゃねー。一日に一度はああいっ顔
をせんといかんねえ。(下村)
日本人が忘れてはいかん顔だと思いま
すよ。(梅野)

以上、一言ずつでした。

岡豊風日(おこうふうじつ) 28号 平成十年七月一日 編集・発行 高知県立歴史民俗資料館	〒783 1-0401 南国市岡豊町八幡1-099-1 TEL 0888(62) 2211 FAX 0888(62) 2110
開館時間 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)	休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日) あたる場合は翌日(12月28日、 1月4日)
入館料 通常期「常設展」大人(18歳以上)400円 団体(20人以上)320円 高校生以下は無料	療育手帳・身体障害者(1・2級)手帳 ・障害者手帳所持者とその介護者(1名)、 高知県長寿手帳所持者は無料
印刷・(南)西村勝堂	